大丈夫っ!
メイドだから!
FOR ADULT

「大丈夫っ！メイドだから！」
２００７年１２月１６日発行

◇うちの本は結構あるのですが・・・
メイド服着せてみたり。

なんか男の子って

メイドさん好きよね

会長がここまで気にするって事は綾崎君か…

でしたら会長もメイドになれば良いですよ

なっ!?

で…でも

そこまでしてもいつも通りかもしれないし…

大丈夫ですよ会長っ

作り笑顔で8割は騙せますから！

べ…別に

騙したいワケではないけど

…で残り2割の場合はどうするのよ？

会長がそこまでしても落ちない相手ですか…？

でしたら最終手段でも使いますか？

最終手段？

せっかくの
メイドですから
ご奉仕しましょう

……っ

当然
「大人向けの」
ですよ？

ええー
っ!?

メイド服は
私が手配して
おきますから
大丈夫ですよ

ダメっ

綾崎君も
適当な用事で
呼び出して
おきますから

では
明日決行で

ちょ…っ

…って事で

いつの間にか
こーなっている
ワケなんだけど…

精一杯の
作り笑顔

……

ヒクッ

な…
なんでハヤテ君
無反応なの？

……

良いにしろ
悪いにしろ
リアクションが無いと
どうしていいか
分からないじゃないっ！

……

なんで
ヒナギクさんが
メイド服で
作り笑顔？

僕…
何かしたっけ？

と…とにかく何か言わないとっ

ぐっ

ど…どうしたんですかそんな格好で…

今日はヒナギクさんがご奉仕でもしてくれるんですか？

いきなり最終手段を求められている

やっぱりしないとダメかな…

そ…そうねしてあげるわ

どうすれば良いのか聞いてはいるけど…

は…初めてなんだから動かないでよ

ヒナギクさん？

へっ？

びくっ

えー…

あうー!!

やっぱり
ちょっと怖…

これはこれで
可愛いけど…

ビミョーに
理解してきた

あれ？
怖いんですか
ヒナギクさん？

このまま
気が変わって
しまうのも
切ないから…

それなら
無理に
しなくても
良いですよ？

ピクッ

むうっ
だっ
誰も
そんなコト
言ってない
でしょっ
ちゃんと
最後まで
やるんだから
じ…っ
じっとして
なさい…よ
ん…っ

くふっ

ちょ…っ
どこまで
大きく
なるのよ…っ

これで
大丈夫なのかな…？

あぅっ

う…っ

大きすぎて
口の中に
入りきらないけど…

イきますよ
ヒナギクさん

あ…っ

ふぁっ？

んっ!?

すごく濃いのが
いっぱい出てる…

良かった。ちゃんとでき…
……
ごくんっ
ヒナギクさんまだですよ
え…？
まだ僕の元気ですから

ヒナギクさんが最後までしてくれるんでしょう？
ちょ…
今更やめるなんてできませんよ
こんなの聞いてな…
ちょっと待っ…

あ…

あんなの入らな…い

やる前から降参するなんてヒナギクさんらしくないですねぇ？

それにもうしっかり濡れているじゃないですか

くにっ

ぶるっ

くりっ

これなら今すぐでも大丈夫ですよ

挿れますね
ヒナギクさん
だ…
ふ…っ
ダメぇ
無理よ！
グッ
やっ
ひぁあうっ
ずぷっ

ちゃんと挿れれたじゃないですかヒナギクさん
うっ
このまま動きますよ
ずるっ
や…やあっ!!
ずっ
ちゅぷっ

せっかく可愛い顔になってきたのにちゃんと見せてくださいよ

や…

あ…っ

ずぷっ

ずずっ

ムリとかダメとか言ってたわりにしっかりと濡れてきましたね

がくっ

がく

——〜…っ

せっかく可愛い声だったのになんで我慢するんですか？

ぷちっ

うっ

ぬぷっ

ずぶぶっ

だんだんいい声になってきましたよヒナギクさん

ぱちっ

…ッ

素直じゃないなぁ…

くりっ

くりっ

あ…っ

くりっ

こんなに乳首立たせておいて

ビクッ

～…ッ

ぺちゃっ

ふ…うっ

我慢強いですね

えっ？

じゃあ体勢を変えましょうか

ぐいっ

ひぁっ

えっ…？
やっちょ…っ
ふるふるっ
ハヤテ君…っ
いきますよヒナギクさん
ぷぷぷ

あっ
こんな格好だめぇ！
ぶるっ
ぶるっ
ぬぷっ
なに言ってるんです？
がくがく
ぶるっ
ぶるっ
さっきより締まりがいいじゃないですかっ
ビクッ
や…ぁっ

う…くっ

せっかくだから
こっちの穴にも
挿れてあげますね

ぐりぐりっ

ぐわぐわっ

ずぷぷっ

ぢゅぽっ

えうう

かくっ

ずぷっ

ひぁ

や…
やだよう

がくがくっ

あっ

ビクッ

イきますよ

がくがく

がくがく

あっ

ずっ

ずずずっ

ふぁっ

ビクンッ

ぶるっ

ぬぽっ

イイ感じに
なってきたじゃ
ないですか
ヒナギクさん

あっ

ひぁあっ

おふぅっ

くっ

あぁぁぁあっ!!
ぐにゅっ
ひぁっ
がくがくっ
ごぽっ
ヒナギクさん

お茶淹れて来ましたけど飲みます？

……っ

キゲンまいなー…

あーっもしかしてイけませんでしたか？

なっ

やめっ

そ…そうじゃなくて

ん？

も…

もう少し優しくしてくれても

良かったじゃない…

す、

ヒナギクさん

今すぐもう1回しましょう

はぁ？

終わりましょう

会長はメイド様!?

鷹宮　沙玖羅

薄いレースのカーテン越しに、やわらかな光が室内を満たしていた。

英国調の調度品で統一されたその中には、これまたセンスのいいテーブルセットがいくつも置かれ、それらのいずれにも人が腰を落ち着け、談笑している。

そのテーブルの間を縫うように、ひらひらのワンピースとエプロンに身を包んだ少女たちが忙しく行き来している。

テーブルの主たちは、そんな彼女たちを熱い眼差しで追いかけていた。

メイド喫茶。

ここは先日オープンしたいわゆるメイド喫茶である。

メイドが客――ご主人様の近くを通れば、瞬く間に注目を集める。

ランチタイムということもあり、たくさんのメイドがフロアを駆け回っていたが、その中でも群を抜いて視線を集めるメイドがいた。

桃色の長い髪をたなびかせ、背筋を伸ばして立つ姿は凛々しく、しかも微笑めばたちまちご主人様の心臓を鷲掴みにする。

彼女は完璧な立ち居振る舞いで、笑顔を振りまいていた。

軽やかにステップを踏み、ふわりとミニスカートをひらめかせる。

そのたびに店内のそこかしこから感嘆の溜息が聞こえた。

楽しそうな姿は、見る者までも楽しい気分にさせる。

けれど、そのメイド本人は、決して穏やかな気分ではなかった。

(どうしてみんなそんなに凝視してくるのよ――っ!!)

360度から常に向けられる熱烈な視線に、彼女はおおいに戸惑っていた。

見られることになら、慣れている。
才色兼備の無敵の生徒会長と呼ばれていることも知っている
し、羨望の眼差しを向けられることもある。彼女自身目立つ存
在であることはまぎれもない事実だし、そんな人物が他にいれ
ば、彼女だって目で追うだろう。けれど――
彼女は完璧な作り笑顔の下で、こっそり溜息を吐いた。
この類の視線には免疫がなかった。
しかも、朝からずっとそれらに晒されていれば、いい加減、
嫌気が差すというものだ。
この中でも平気で働いていたであろう友人を思い、彼女は初
めて敗北感に打ちひしがれた。
敵わない。
この環境で作り笑顔を振りまける友人の神経には一生敵わな
いと思った。
メイド喫茶なんて、彼女には一生のない場所だと思ってい
た。実際、存在こそ知っていても入ろうと思ったことすらない。
だからこんな視線とは無縁で過ごせたかもしれないのに。
彼女は自分の軽率な行動を呪っていた。
そもそも彼女がメイド喫茶で働くきっかけとなったのは、学
校帰りに偶然友人がメイド喫茶に入っていくのを見てしまった
ことだった。
そこでスルーしてしまえばよかったのに、なぜか興味が湧い
て店内に入ってしまったのがいけなかった。
オーダーこそ問題なく終わったが、注文したドリンクを運ん
できたのが運の悪いことに例の友人だったわけである。
そのときの気まずい空気といったら。
それからは口止めされて終わるかと思いきや、一週間だけシ
フトを代わって欲しいと頼み込まれて、しかたなく臨時でバイ
トすることになり今に至るというわけである。
(でもどうして急に私に代わりに働いて欲しいなんて…)
友人は家の用事だと言っていたけれど。
ともあれ、一度引き受けた仕事を途中で放り出すことなどで
きない彼女にしてみれば、理由なんて今更どうでもいいことな
のだが。
こうなったら覚悟を決めるしかないだろう。どうせ一週間限
定なのだから。
気合を入れなおして、彼女は3割増の作り笑顔でフロアを駆
け回った。

入り口ドアのベルが鳴る。
彼女は幾分慣れた様子で満面の笑みを浮かべた。
「お帰りなさいませ、ご主人さ…」
入り口を振り返った彼女は、しかし不自然な格好のまま固ま
った。そのまま血の気が下がり、冷や汗がダラダラと流れ落ち
る。
入ってきた人物は困ったような笑顔を浮かべながら、居心地
悪そうに頭を掻いた。
「…えっと――ただいま?」

「なんでここにハヤテくんがいるのよ?」
耳まで真っ赤に染めながら、ヒナギクはハヤテのテーブルに
水を運んだ。
さっきから心臓がばっくばっくんと飛び跳ねている。
よりによって、彼に見られてしまうなんて。これではヒナギ

クがメイドに憧れていると誤解されてしまうかもしれない。
べつにハヤテがメイド好きだからここで働いているわけでは決してないのだ。
ハヤテはいつもどおりののほほんとした笑顔でメイド姿のヒナギクを眺めている。
「いえ、とある筋からヒナギクさんがこちらで働かれているらしいとお聞きしたものですから」
「なっ」
ヒナギクは絶句した。まさか噂になっているとか？もしかしたら彼女のことを知っている人が客としてやってきたのかもしれない。嫌な汗が背筋を伝う。
「ご、誤解しないでよ？べつにあなたのためにメイドをしているわけじゃないんだから」
一瞬ハヤテはぽかんと彼女を見上げた。その様子に、ヒナギクは自分が墓穴を掘ったことに気付く。
「あっ、いやっ、あのっ」
「……へえ、僕のためにこんなかわいらしい格好をしてくださったんですか？」
「やっ、だから違うって……」
うろたえるヒナギクを眺めて、ハヤテはニヤリと笑った。
幸か不幸か、ヒナギクはその変化に気付かない。
「あの、ヒナギクさん、僕ちょっとお手洗いに行きたいんですけど、案内してもらえますか？」
「へ？」
急に話題を転換されてヒナギクは戸惑ったが、ハヤテの興味が自分から逸れたと感じて、ほっと息をついた。
特に考えることなく、これ幸いと案内する。
この行動こそ迂闊だったのだが、いつもの冷静さを欠いた彼女には気付くことができなかった。
「え、えっと、こっち。ちょっとわかりにくいからついてきて」
「はい、ありがとうございます」
ヒナギクはくるっとターンをしてきれいにスカートの裾を翻らせて案内に立った。
さすがは優等生。無意識のうちにも立ち居振る舞いにそつがない。周りの座席から溜息がこぼれた。
「ここよ。この扉の奥に……って、ハヤテくん！そっちじゃないったら！そっちは関係者以外立ち入り禁止…っ！」
ヒナギクの静止を聞かずに従業員控え室に向かうハヤテを、彼女は慌てて追いかける。
メイドが交代で昼休憩を終えたばかりの控え室の中には、人気がなかった。
「へえ、中はこうなっているんですね」
無機質なロッカーが立ち並ぶ中にも、花が活けてあったりふかふかのラグマットが敷いてあったりと、あまり硬質な印象は受けない。さすがは女の子の職場、といった感じだ。
「もう！ハヤテくんったら、ここは立ち入り禁止なのよ!?早く出て…」
叱るヒナギクの言葉を遮って、ハヤテは彼女の手首を掴んだ。
「え…？」
「すみません、ヒナギクさん。ヒナギクさんにお話があったものですから」
ハヤテの笑っているのに笑っていない顔に怯んで、彼女はずりずりと後退りをした。ハヤテもその動きに合わせて歩を進める。
「…な、なによ、話って…」
「ヒナギクさん、そのメイド姿、とってもかわいらしくてお似

合いですよ」
「……えっと…、それは、ありがとう」
ハヤテの意図がわからずに、ヒナギクは戸惑いながらも律儀に礼を言う。
けれど、背中が壁に当たり、逃げ場がないと悟ると彼女は身体を強張らせた。
「そこでお願いなんですが」
「な…によ」
掴まれている手首を振り解こうにも、びくともしない。彼は見た目のわりに、力が強いのだ。
ハヤテはヒナギクを壁に押し付けるようにして圧し掛かった。
「僕以外の人に、その姿を見せないでいただきたいんです」
「…なんでよ」
ハヤテはヒナギクに睨まれても怯むことなく最高の作り笑顔を浮かべた。
「お気に入りのコのかわいい姿を他の人には見せたくない。自分だけのものにしていたいっていう、愚かな男心です」
「なっ…」
ヒナギクの頬が一瞬で朱に染まる。
こんな状況だというのに、彼女の心臓はばくばくと主張をし始めた。
けれど、ここで流されるわけにはいかない。勝手に約束を反故にはできない。
「それは、できないわ」
「なぜです？」
口調こそ穏やかなものの、彼の言葉にとげが含まれる。
それでも彼女は毅然として宣言した。ここで簡単に折れるくらいなら、白皇の生徒会長などしていない。
「今日からここで一週間働くことになってるの。初日でやめられるわけないじゃない」
周りの空気が一気に冷えた気がして、ヒナギクは喉を鳴らした。掌が汗ばんでくる。彼女はここにきて、はじめてハヤテが怖いと思った。
「ヒナギクさん、気付いてないんですか？客の視線に」
「ぐ…っ、…き、気付いてるわよ。みんな私を見てるわよね。それならとっくに慣れたわよ」
本当はちっとも慣れてなどいないけれど、ヒナギクはつい見栄を張った。
ここで弱いところは見せられない。弱音を吐けば、口のうまい彼にきっとたちまち辞めさせられてしまうだろう。
ヒナギクは意地になっていた。ここで辞めたら負けな気がした。
ハヤテはさらに距離を縮めて、彼女の耳元に唇を寄せた。
「本当にわかっているんですか？視線の意味に」
「わかってるったら」
「本当に？」
「しつこいわね」
ヒナギクは頑として譲らない。
もはや何について意地を張っているかわからなくなっていたが、ハヤテの思い通りになることだけは嫌だった。それでは負けっぱなしである。
ふたりはしばらくの間睨み合っていたが、やがてハヤテが折れた。
「……わかりました。そんなにヒナギクさんがお客さんに執拗に見られたいなら、もう止めません」
「なっ…！どうしてそういう話になるのよ!?」

憤慨するヒナギクを遮り、ハヤテは再び笑顔を向けた。ただし、その顔は完全に笑っていない。
「その代わり、見せるなら最高にかわいい姿じゃないといけません」
「は…ぁ？」
「そのためには準備が必要ですから。僕がお相手を務めさせていただきます」
「ちょっ…な、に……んんぅ…っ！」
ヒナギクが展開についていけないまま、気付くと彼女の唇はハヤテのそれに塞がれていた。
隙間なくぴたりと合わせられ、不慣れなヒナギクの呼吸すらも奪う。
一瞬唇が離れた隙に、息苦しさに彼女は喘いだ。
けれど、薄く開いた唇ごと再びハヤテは貪り、彼女の口内に舌を差し入れた。
「んぅっ！ん――っ！」
華奢な肩がビクンと震える。
逃げる彼女の舌を追いかけ、絡め捕って吸い上げる。
ふたりの唾液が混ざり合い、泡立ってヒナギクの顎を伝った。
彼女の頬は紅潮し、抵抗する力も失われた。
ハヤテは彼女の片手を解放すると、小ぶりな乳房をメイド服の上から掴んだ。
「んんっ!!」
彼女は飛び上がり、弱々しく抵抗するものの、簡単に押さえつけられる。
何度も角度を変えては、彼は桜色の唇を弄んだ。
始めはゆっくりだった彼の手が、しだいに性急にヒナギクの胸を揉みしだいていく。
「ん…ふ…、…んんぅ…！」
鼻から抜ける息に、熱がこもる。
舌の裏側や口蓋を舌先でつつけば、彼女は脚を奮わせた。
「あふっ、ん…ん――っ」
彼女の身体全体がカクカク震えだし、不意に膝が崩れた。
「おっと、まだだめですよ」
ハヤテは座り込もうとするヒナギクの股の間に片膝を差し込み、彼女の力の入らない身体を支えた。
「もう降参ですか？でもまだだめです。僕が責任を持って、ヒナギクさんを最高にかわいい姿にして送り出して差し上げますよ」
ハヤテはヒナギクの胸元に手を伸ばし、ボタンを外し始めた。
「も……やぁ……」
抗いたいのに、濃厚なキスで腰が抜けてしまったのか、脚に力が入らない。不本意ながら、ハヤテの膝に跨らされている。
ヒナギクは敏感な部分で全体重を支えさせられて、その刺激に涙を浮かべた。
ハヤテに直接触れられることなく熟れたそこは、支えるハヤテのズボンすらも湿らせている。
胸元のボタンがすべて外れてしまうと、ハヤテはためらうことなくその中に手を差し入れた。
「ひぁぅ…っ！」
下着を押しのけて小さいながらもやわらかい乳房を掴むと、かわいらしい悲鳴が聞こえた。
焦らすようにゆっくり回したかと思えば、わざと荒々しく性急に追い立てる。
「やっ！も…ぅ…ひぁあんっ！」
硬くしこった先端を摘めば、ひときわ高い嬌声が漏れる。

無意識のうちにハヤテの膝に擦り付けられている彼女の秘部からは、粘ついた音がひっきりなしに聞こえている。
ハヤテのズボンは、ヒナギクからあふれたものですでにかなり湿っていたが、ヒナギクの下着はそれの比ではなかった。
「…ああ、いいですよ、ヒナギクさん。もっと乱れてください。もっと僕にかわいい姿を見せてくださいよ」
「いじ…わる…」
ヒナギクは明滅する理性でかろうじてハヤテを睨んだ。
けれどその頬は快楽に火照っていたし、潤んだ瞳では彼に更なる刺激を請うているようにしか見えない。
「…まいりましたね。聞き分けが悪いヒナギクさんにはもっと焦らしてお仕置きして差し上げようかと思っていたんですが、そんなふうにかわいらしくおねだりされたら、はやく挿れてあげたくなってしまいます」
ヒナギクは最悪の言葉を聞いた気がした。
まさかここで最後までやるつもりなのだろうか。扉一枚隔てたフロアには、まだ人がたくさんいるというのに。
「おねだりなんてしてない！お願いハヤテくん、もうやめ……きゃぁっ！」
ヒナギクが言い終わらないうちに、ハヤテは彼女の腰を支点にしてくるりと回転させ、足元のラグマットの上に細い身体を押し倒した。
それほど痛くはなかったけれど、急に頭が振られてふらふらする。
「なに言ってるんですか、ヒナギクさん。こんなドロドロにしておいて」
「ひっ！」
ハヤテに下着越しに秘部を掴まれて、ヒナギクは喉を鳴らした。
いつの間にこんなにあふれていたのか、たしかにそこはどろりと湿った感触を彼女の肌に伝えている。
「いつからです？もしかして客に見られて感じていたんですか？見かけによらず淫らな人ですね」
「や、ちが…」
必死に否定するも、もとよりハヤテに彼女の言葉を聞くつもりはないらしい。
戯れに呼吸を奪っては、ツンと尖った胸の先端に舌を這わせた。
「やぁあっ！」
ヒナギクの身体がビクリと跳ねる。
「…またあふれてきましたよ？ほら、もうこんな薄い下着では受け止めきれないくらいに」
揶揄して、ハヤテは素早く下着を彼女の脚から抜き去った。
「やっ！なにす…」
「もういらないでしょう？こんなに濡れていては使い物になりません」
彼は小さく畳んだそれを、ジャケットのポケットにしまった。
そして、横たわるヒナギクをまじまじと観察した。
「それにしても、乱れたメイド服ってのもなかなかそそりますね。ご主人様に絶対服従の証ですか？」
「な…によ、それ…」
はだけた胸元をかき合わせる少女を、ハヤテはおもしろいものを見るような眼差しで観察していた。
これだけ好きに触らせておいて今更恥じらいも何もあったものではないとは思うが、何度身体を暴いても、変わらず初々しさを見せる彼女を、ハヤテは気に入っていた。

次はどんなことをして苛めてあげようか、と思ってしまう。
「ヒナギクさん」
「な、なによ」
逃げようと後退る細い足首を掴んで引き寄せる。
怖くてたまらないくせに、意地を張って睨み上げてくる瞳に、ハヤテは愉悦すら感じる。
涙に揺れる強気な瞳の中に見える怯えの色。
それが彼にのみ見せられるものであることを、彼自身、自覚していた。
身体をいいようにされて怖いはずなのに、怯えと同時に期待の色を滲ませている正直な瞳。
ハヤテは喉の奥でこっそり笑った。
「もう一度言います。僕以外の人に、その姿を見せないでください」
ヒナギクの肩が強張る。
ハヤテの意図に気付いた彼女は頬を染めて視線を逸らした。
「……だめよ。約束したもの。途中でやめられないわ」
「強情ですね。…しかたありません」
「あっ！」
ヒナギクの脚が大きく開かされる。
恥ずかしい箇所を曝け出させられて、あまりに恥ずかしくて彼女は手で顔を覆った。
「淫乱なヒナギクさんには、どうやって仕込んで差し上げれば効果的でしょうか。嫌がってたくせに、ここをこんなにヒクヒクさせて」
「あんっ！」
震える花弁をハヤテが弾くと、ヒナギクは甘えた声を上げて身体をビクつかせた。
「僕に弄られて悦んでいるんですか？ほんとうにエッチな人ですね。今だってすぐに僕のを挿れてほしくてうずうずしているんでしょう？こんなにはしたなくよだれを垂らして」
「ん……！」
ヒナギクはハヤテに秘部を曝け出したまま、ぶるりと身を震わせた。
夢見心地でどこか焦点の定まらない目でとろんと彼を見上げている。
薄く開いた口からは、乱れた熱い吐息が零れていた。
「おやヒナギクさん。そんなに陶酔しきって。僕の言葉にすら感じているんですか？本当にヒナギクさんは苛められるのが好きですねぇ」
ハヤテがわざと彼女の痴態を揶揄すると、案の定、蜜があふれてマットを汚した。
「……い…挿れたいんなら、はやくすればいいでしょ！私と…えっち…したくてここに連れ込んだくせに」
「それは心外ですね。僕は本当にヒナギクさんにお話があっただけなのに。抱かれたかったのはヒナギクさんのほうでしょう？その気になればいつだって逃げられたはずなのに、あなたはそうしなかった」
「……っ」
ハヤテは押さえつけていたヒナギクの脚を解放した。
「……え？」
不審に思った彼女が見上げると、ハヤテはこの上なく楽しそうな笑みで彼女を見下ろしていた。
「待っていても僕からは何もして差し上げませんよ。今はね。僕の言うことをちゃんと聞けたら、ご褒美としてたくさん突き上げてあげます。欲しいでしょう？僕のモノが」

ヒナギクの肩がビクンと跳ねる。
「……っ、ん――っ！」
彼女は一瞬身体を硬くすると、脚を震わせた。充血した秘部がわなないて、中から粘液を飛び出させる。
彼女は耳まで赤く染めて、濡れきったそこをスカートで隠した。
熱い耳にハヤテの押し殺したような笑いが聞こえる。
「ヒナギクさん、今、軽くイったでしょう？エッチな人ですね。僕に突かれるのを想像しただけでイっちゃったんですか？」
「……」
「ほら、ヒナギクさん。僕にいっぱい弄ってほしいんでしょう？こんなに感じた状態じゃ仕事になんて戻れませんしね」
「……どう…すればいいのよ？」
震える声で、ヒナギクは彼に請うた。
彼の言うとおり、このままでは身体が熱くて仕事になんて戻れそうもない。
悔しさと羞恥に歪むきれいな顔を見下ろして、ハヤテは満足げに頷いた。
「自分でしてみせてください」
「……え？」
「ヒナギクさんがいつも僕にされるのを想像しながらひとりでしていることを、今、僕の目の前でやってみせてください。簡単なことでしょう？しっかり僕に見えるように、大きく脚を開いてくださいね」
見る見る間にヒナギクの顔が強ばっていく。
彼女はぎこちない動きで首を振った。
「や…いや…そんなこと…」
「するんです。ああ、でも勘違いしないでくださいね。これは命令ではなくて、あくまでお願いですから。僕はヒナギクさんの意思でエッチなことをしてほしいんです。無理強いはしませんよ」
ハヤテはやわらかな言葉で、しかし確実にヒナギクを追い込んでいく。
彼女に拒絶するだけの余裕がないことを承知で、この取引を持ちかけているのだ。あくまで自分から欲しがらせるために。
精神的な降伏こそ、ハヤテがもっとも望んでいるものだった。
ヒナギク自身もそれがわかっていたが、だからといってここまで煽られた熱を自ら治めることは、すでに不可能だった。
「うっ…」
彼女は頬を染めてうつむくと、マットに座ったまま膝を立てて熟れた秘部に指を伸ばした。
「…んっ…」
ピチャ、と濡れた音が聞こえる。
ヒナギクの細い指が割れ目に沿ってゆっくりと上下され、そこからあふれた液体が秘部全体に塗りたくられていく。
その動きはしだいに速くなって、彼女自身の呼吸も荒く熱を帯びる。
「……ぁ、…はぁ…っん……あ…」
指を2本濡れた穴に突き入れると、彼女は夢中で内壁を弄った。
ハヤテにこんな恥ずかしい姿を見られていたたまれないのに、焦らされた身体は貪欲に刺激を求めてしまう。
一度弄りだしてしまうと、もう止められなかった。
やめてしまいたい理性とは完全に切り離された身体が、勝手に快楽を貪ろうとしてしまうのだ。
「ふぁ…ぁ…あ…っ！」

卑猥な水音が大きくなる。
指の動きが激しくなり、とめどなくあふれる粘液が彼女の手をベタベタに濡らしていた。太腿にも飛沫が散っている。
「あ…ん、ハヤテく……ハヤテくぅ…んっ！」
指はいつしか4本に増え、しきりに蜜壺からトロリとした蜜を掻き出している。
そんなヒナギクの痴態を、ハヤテはただ黙って見下ろしていた。
しかし、そんな突き放すような冷たい視線に、ヒナギクの背筋はゾクリと快感を訴える。
見られて恥ずかしいのに、身体は悦んでいる。
侮蔑とすら取れる視線にすらも、彼女の身体は悦楽を感じた。
「ハヤテくん、見ちゃ…や…、こんな私…っ！……あっ！やぁっ！」
秘肉が雄を求めて、ヒクヒクしている。
いちばん恥ずかしい部分にハヤテの視線を感じて、ヒナギクの秘部はまた熱く熟れた。
控え室にこもるむせ返るような甘い香りがいちだんときつくなる。
ヒナギクは朦朧とする頭で、ひたすら自慰にふけった。
直接触れられてはいないのに、視線だけで身体の奥深くまで犯し尽くされるような錯覚に陥って、また濡れた。
4本の指を広げるようにして内壁を擦る。
その指がハヤテのモノだと想像すれば、入り口がせつなげにきゅんと締まった。
「ひぁっ！イク…っ、イっちゃ…、…やぁあぁぁぁ――っ！」
背中をビクビクンッと大きく痙攣させると、ヒナギクは力を失ってラグマットの上に手足を放り出した。
放心したように天井の一点を見つめ、荒い呼吸を繰り返している。
彼女の下半身は、何度も犯された後のようにドロドロだった。
ぐちゃぐちゃに乱れたメイド服に身を包んだ少女を見て、ハヤテは口端を吊り上げた。
「いい格好ですね。そんなになるほど僕のが欲しいんですか？」
「…あ…欲し…」
ヒナギクはじんじんする秘部を擦り合わせて身悶える。
理性など、この瞬間には吹き飛んでしまっている。
「いいでしょう。ぞんぶんに咥え込んでください」
ハヤテは小刻みに震える彼女の脚を無理やり開かせると、その中心部に屹立する自身を勢いづけて突き込んだ。
「ひっ！ぃぁあっ！」
叫んで、ヒナギクは白い喉を仰け反らせた。
準備されきったそこは、なんの苦もなくハヤテを受け入れる。
けれど、感覚は彼女に雷に打たれたような衝撃を与えた。
達したばかりで極限まで敏感になっている秘部を、一瞬にして最奥まで突かれたのだ。
彼女の視界がチカチカとスパークする。
「ほら、ヒナギクさんはコレが大好物なんでしょう？心ゆくまで召し上がってください」
「！ひ…いっ！」
軽く腰を揺すられるだけで、ヒナギクは再び快楽の奔流が駆け上がってくるのを感じた。
「すごいですねヒナギクさん。ねっとりと僕に絡み付いてきていますよ。ヒナギクさんは欲張りですねぇ」
「――っ！」

ハヤテは性急に腰を前後させ始めた。
肌が肌を打つ乾いた音が辺りに響く。
ハヤテが掻き出した粘液が泡立ってヒナギクの臀部に滴った。
「ひっ、あっ、あ、ぁっ、あ――っ！」
ハヤテの勃起した陰茎が出し入れされるたびに、陰唇がめくれ上がったり奥に巻き込まれたりして、ヒナギクに気絶しそうな快感を与える。
「ああ、ヒナギクさん、そんなに締め付けたら膣内に射精してしまいますよ」
彼女ははっと目を見開いて肩を強張らせた。
「やっ！だめっ！膣内はだめぇっ！」
意識すると逆に、彼女の秘部はさらにきゅっとハヤテを締め付けた。
ハヤテが苦笑する。
「だから、そんなに締めないでくださいってば」
「や…無理…っ」
ヒナギクは泣きそうな顔で首を振った。
いくら緩めようとしても、彼女の意思とは無関係に秘肉が蠢き、ハヤテを貪ろうとしてしまう。
ハヤテの言うとおりだ。ヒナギクは今まで、ハヤテが欲しくてたまらなかった。彼に挿れられるのを想像しては何度も達した。
「そんなに締めると射精してしまいますってば。…ああ、そうか、ヒナギクさんは本当は膣内に欲しいんですね」
「ちが…、ひっ、あっ、あぁ…んっ！」
ハヤテの抽挿が激しくなる。
それに応えるように、ヒナギクの秘部がさらに、彼自身に絡みついた。

「こんなに気持ちよさそうに腰を振って…。欲しいものを欲しいって言わないと後悔するって言ったのはヒナギクさんじゃないですか。ほら、もっと素直に欲しがっていいんですよ」
ヒナギクの瞳から、生理的な涙がひとすじ零れ落ちる。
彼女は自身でも気付かないうちに、男を誘うような熱っぽい表情を浮かべてハヤテを見上げていた。
しなやかな腕がハヤテの背に回され、力が込められる。
「ハヤテく…ん、お願…もっと…、もっと突いてぇ…っ！」
濡れたヒナギクの目元に、ハヤテの唇が落ちる。
触れる肌は、彼の言葉とは裏腹にひどく優しいもので、ヒナギクはまた涙がこみ上げてくるのを感じた。
二人の間で聞こえる濡れた水音も、今の彼女には気にならなかった。いや、気にしている余裕は、すでに彼女にはなかった。
無我夢中でハヤテにしがみつき、腰を振っている。
ハヤテの抽挿は、最奥のさらに奥まで貫くほど強くヒナギクを責め立てる。
けれど、彼女に与えられるのは、痛みではなく快楽のみだった。
ハヤテは彼女の身体が逃げないように脚を抱え込むと、彼女がいちばん嬌声を上げる箇所を集中的に突いた。
「ひぃっ！ひ…あ…ぁ…、イ……イクッ、イクイクぅ…っ！……え？…」
ハヤテの動きがピタリと止まる。
絶頂の直前で刺激を奪われて、彼女の秘部がもどかしさにむせび泣いている。
あと少しでイけたのに、出口を失った熱がヒナギクの身体を駆け巡り、全身を性感帯にする。
「や…いや…なんでぇっ」

ヒナギクはハヤテにしがみつくと、むずがる子供のごとくいやいやをした。
そんな少女をあやすと、ハヤテはやんわりと彼女の腕を外させた。
「だめですよ、ヒナギクさん。そんなにすぐ何度もイっては。忘れたんですか？僕はヒナギクさんを最高にかわいい状態にするためにあなたを抱いているんですよ？」
「え…？なに…？」
刺激を与えられないまま、ヒナギクの身体はもうどうにかなりそうだった。
ハヤテに触れている部分すべてが溶けそうで、思考力が完全に奪われていく。
「限界まで焦らされて乱れ喘ぎまくるヒナギクさんは最高にかわいいですよ。本当はこの状態のままフロアに戻っていただきたいんですが、そうもいきませんからね。いつでも男を誘う顔ができるようにして差し上げますよ」
「ハ…ハヤテく…、欲し…っ、…ひぅ……欲しいのぉっ！」
ヒナギクはハヤテの腰に脚を絡めて、自らの秘部を擦り付けた。ハヤテがふっと笑う。
「おや、もう聞いていませんね。しかたありません。ヒナギクさんが欲しいもの、たくさん受け取ってくださいね」
ハヤテは繋がったままヒナギクを回転させると、後ろから勢いをつけて挿し貫いた。
「ひぁあぁあぁっっ！」
叫ぶと、ヒナギクは尻を高く突き上げるような形でラグマットの上に崩おれた。
彼女の腰を支えたハヤテがさらに質量を増した自身を、根元まで彼女の膣内に何度も打ち込む。
そのたびに、悲鳴にも似た嬌声が彼の耳を悦ばせた。
わざと声の上がるポイントを苛める。
彼女の肩がビクビク震える。
「あぁっ、あっ、ぁあぁ――――っ！」
抜き挿しするたびにドロリとした液体がヒナギクの太腿を汚していく。数滴、マットの上にも滴っている。
「ヒナギクさん、いいんですか、そんなに叫んで。気持ちいいのはわかりますけど、ここがどこだかちゃんと覚えています？そんな大きな声を出しては、フロアにまで聞こえてしまいますよ？」
「うっ…」
ヒナギクの身体が強ばる。
ハヤテの言葉は今度こそ伝わったらしい。
「ほら、お望みどおりたくさん突きますよ」
ハヤテは速度を上げてドロドロの内壁を蹂躙する。
「ひっ！…っん、んん――――っ！」
ヒナギクはけなげに口を手で覆った。
けれど、ヒナギクの弱いところを知り尽くしているハヤテには、そんなこと気休め程度にしか思えない。
「ほらほら、ここがイイんでしょう？サービスしますよ」
ハヤテは奥のある一点を責め立てる。
ヒナギクの秘肉が、彼を喰いちぎらんばかりに締め付ける。
「んんっ！…ひぁ…ぁ……ぁあぁぁんっっ！」
ガクガク震えていた膝が力を失って崩れた。
けれどハヤテはそれを赦さずに、力の入らない腰を掴んでは なおも自らの腰を打ちつけた。
もはやヒナギクの身体は、自身では動かすことすらままならない。

彼女にできることは、ただ快楽を受け入れることと、喘ぐことだけだった。
意思とは関係なく、身体がハヤテを求める。
秘肉があさましく蠢いては、快楽の源をさらに奥に呑み込もうとしている。
「あっ！あんっ！いい…っ、もっとお…っ！」
彼女の身体がカクカク震えだし、膣内のハヤテをきゅうきゅう締め付ける。
「…くっ…ヒナ…ギクさん…」
ハヤテはヒナギクの腰を抱えなおすと、文字通り夢中で彼女を貪った。
彼女の膣内に溜まっていた粘液が、挿入の圧力に耐えかねて飛び出してくる。
全身脱力しているはずなのに、ハヤテを咥え込んでいる箇所ばかりは、信じられないくらいの強さで彼を拘束していた。
下半身が大きく脈打ち、ハヤテ自身に限界を訴える。
ハヤテの呼吸が荒くなる。
言葉もなく彼女の最奥を突き上げる。
彼の性器がひときわ大きく振動する。
「…くっ！」
「っひぃ、…やぁあああぁぁあ――――っ！」
ハヤテはブルリと身を震わせると、大量の精をヒナギクの膣内に放った。

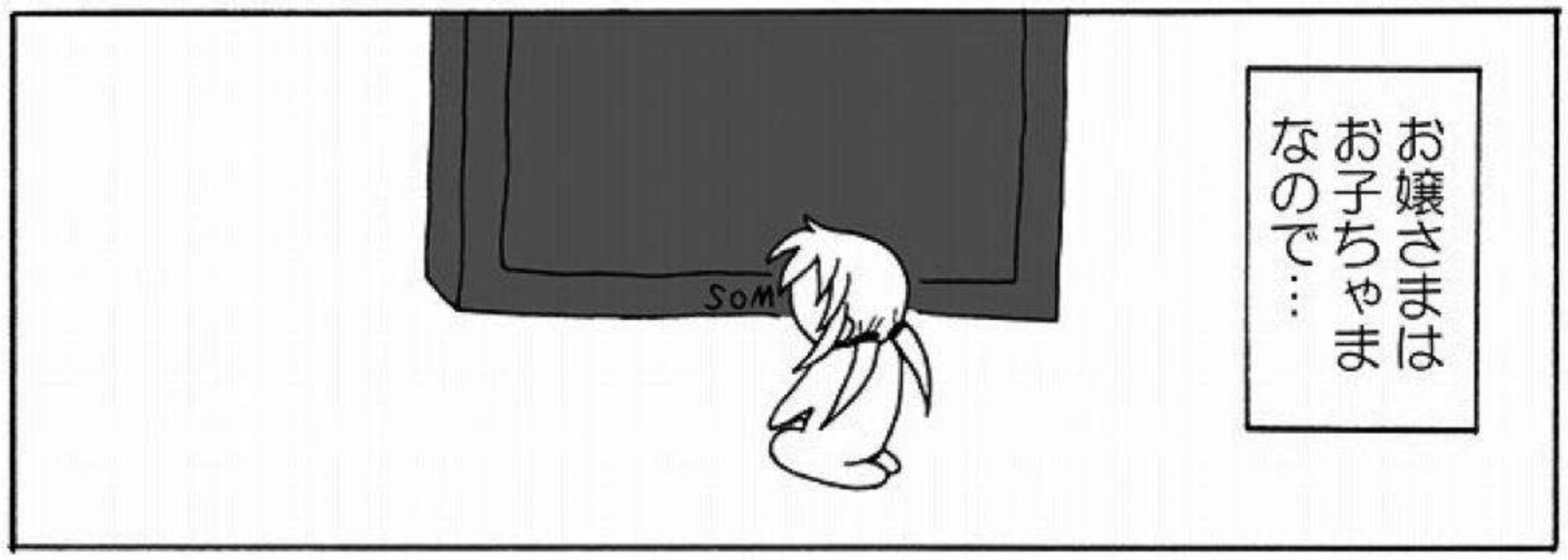
「返してよ」
行為の残り香が漂う中、立ち上がれずに、ペタリとラグマットの上に座ったヒナギクが、ハヤテに手を差し出した。
激しい行為の名残か、彼女の頬はいまだ紅潮し、声もわずかにかすれている。
対照的に、疲労などまったく見せない様子で着衣の乱れを整えていたハヤテは、笑顔を浮かべたままわざとらしく首を傾げた。
「何をです？」
しらじらしい返答に、ヒナギクのこめかみに青筋が浮かぶ。
「下着よ下着！このままじゃフロアに出られないじゃないのよ！」
彼女は再び耳までを真っ赤に染めてわめいた。
彼女の下着は、行為の最中にハヤテが自分のジャケットのポケットに入れたままになっている。
一度濡れた下着を身に着けるのは抵抗があったけれど、ほかに着替えがないのだ。しかたがない。
しかし、ハヤテはそれすら及ばない最悪の選択肢を突きつけてきた。
「それはできません」
「なんでよ？」
あまりにきっぱりと言い切られ、思わずヒナギクはたじろぐ。
「はじめに言ったはずですよ。見せるなら最高にかわいい姿で、と。下着をはかないまま、羞恥に耐えながらお給仕するヒナギクさんは最高にかわいらしいと思いますよ。ああ、でも気をつけてくださいね？ここのメイド服はスカート丈がずいぶん短いようですから、もしかしたらご主人様方に下着をはいてないことを気付かれてしまうかもしれませんよ？」

悪魔の宣告を耳にしたヒナギクは、いっせいに血の気が引くのを感じた。
なに？下着をはかずにフロアに出る？
そんなことをしたら、客や従業員に確実に気付かれてしまうだろう。ただでさえ短くてひらひらしたスカートなのだ。ふとしたはずみで捲れてしまうことだってあり得る。
恐慌し、慌ててハヤテのもとへ近づこうとしたヒナギクは、しかし途中で崩れた。
腰が立たない。まるで作り物の脚がついているように、彼女の思い通りに身体が動かない。
「やっやだ…お願…返してよ…」
泣きそうになりながら、必死にハヤテを見上げる。
けれど、ハヤテは彼女のそんな様子すらも楽しんでいるようだった。ポケットから下着を取り出しては、それに口吻けをし、またポケットにしまった。
そのまま扉に近づく。
「それから、たくさんのご主人様に見られてもあまり感じちゃだめですよ？ヒナギクさんのエッチな汁が垂れて、ばれてしまいますからね」
「――っ！」
「ではお仕事、がんばってくださいね」
目の前で扉が閉まる。
とうとう彼は、彼女の下着を持っていってしまった。
これで彼女は、フロアに出るなら下着なしで給仕をしなくてはならなくなった。
これがハヤテの実力行使だ。
ヒナギクの睫毛が怒りに震える。
「ハ…ハヤテくんのばかぁ――っ！」

「で、会長。初めてのメイド体験はいかがでしたか？」
早朝の生徒会室。
気持ちを落ち着けるためにそこに向かったヒナギクを、生徒会の書記が当たり前のように出迎えた。
彼女の言葉を耳にしたヒナギクは、硬直して机の上の書類を見つめた。
「な…ど…、どうもしないわよ」
彼女が店内で起こったことを知るはずがないのに、様子を問われるとつい動揺してしまう。
あからさまに不審な対応をするヒナギクを彼女はチラリと見やると、口の端に笑みを浮かべた。
「そういえば、誰か知り合いにはお会いしました？あの店はあれでけっこう繁盛しているみたいですから、たくさんの客が来たでしょう？」
「えっ？やっ、べつにハヤテくんとは…」
「綾崎くんですか？」
「えっ!?」
ヒナギクはやっと墓穴を掘ったことに気付いたが、後の祭りである。
生徒会役員をしているだけあって、彼女はなかなかに聡い。
ヒナギクは冷や汗を垂らして反応を探ったけれど、予想した厳しいツッコミはなかった。
代わりに、彼女は歳相応のかわいらしい笑みを浮かべた。
友人の初めて見る表情に、不覚にもヒナギクはつい見入ってしまった。

「よかったですね」
「はい？」
ヒナギクは言われた言葉の意味がわからなくて戸惑った。
友人は眼鏡の位置を直すと、意味ありげな視線で言葉を続けた。
「会長は綾崎くんに、メイド姿を見てもらいたかったんでしょう？」
「えっ？やっ、なんっ？」
ヒナギクの頬が瞬く間に赤く染まる。
どうして彼女がそれを知っているのか!?
ヒナギクは誰かに打ち明けたことなど、一度としてなかったのに。
これはマズイ。非常にマズイ。
「さて、私はそろそろ失礼しますね。ではまた後ほど」
彼女はさらりとヒナギクに爆弾を投下して、さわやかに去っていった。
一方、ひとり残されたヒナギクの頭はおおいに混乱していた。
「…ちょっと待って。もしかしてバレバレなの？それって…」
ヒナギクは全身をゆでだこにすると、冷たい机に突っ伏した。
天下無敵のはずの生徒会長がなんという失態。
何人にバレているのか、想像もつかない。
これからどんな顔をして学校に来ればいいのか。
いや、それ以上に、ハヤテにも気付かれていたのだとしたら、
彼にどう接していったらいいのか。
彼女の瞳に涙が浮かぶ。
そうだ。これも全部ハヤテが悪いのだ。ハヤテがヒナギクを翻弄するのがすべての元凶なのだから。
無理やり納得すれば、彼女のこぶしがプルプル震える。
「ハ…ハヤテくんのばかぁ――っ！」
彼女は再び照れ隠しに叫んだのだった。

―終わり―


お嬢さまはお子ちゃまなので…
SOM

すぐテレビの影響を受ける！
私も「しょこたん」のごとく、街中をコスプレで歩く！

秋葉原以外の街をテレビカメラ無しでコスプレが歩いても何もいい事なんて無いですよ？
なまじっかコスプレが社会的に認知されたせいでコレは仕事着だというのにメイド服というだけで生暖かい目で見られたり街中で写真撮影申し込まれたりで仕事に支障がねぇ…。
あくまでマリアさんの意見です。

お嬢さまは無理矢理女装させられた事がないからそんな事を言えるんだ！
異議あり！
お嬢さまが女装するのは普通です。

お嬢さまはお子ちゃま（以下略）
私も「しょこたん」のごとくブログを一日に七〇回以上更新する！
カタカタカタカタカタカタッ
カタ…
三行で飽きた。
早すぎ！

更新終了。